

二〇二二年版（二〇二一年四月～二〇二二年三月）

すぎなみ詩歌館

角川庭園の短歌・俳句



はじめに

角川庭園・幻戯山房「すぎなみ詩歌館」において、二〇二一年度に開かれた歌会、句会で詠まれた作品をまとめました。俳句は本年五月末から六月にかけて、短歌は十月に展示室に既に掲示させていたただいており、それに指導の先生の作品を加え、一冊になりました。

コロナ感染症の流行はまだ続いています。平時ではないが故に、角川庭園において、多くの人が詩歌を楽しまれたのではないのでしょうか。

短歌六グループ、俳句十七グループに、講座がそれぞれ一グループの活動記録が出来上がりました。短歌と俳句が同時に掲載され、また指導の先生の個性を反映しての作品が並びます。「すぎなみ詩歌館」でしかできない小冊子だと思っています。

(山石隆光)

◇ 目次

短歌編

野蒜短歌会……………6
サルビアの会……………7
花水木の会……………9
萩窪ときわ短歌会……………10

俳句編

花芭蕉俳句会……………16
句歌詩帖草藏……………17
幻戯会……………18
萩窪句会……………19
青丹会……………21
くるり……………22
スナメリ句会……………24
泉句会……………25
俳句鶴の会……………26

花蕾の会……………11
花集会……………12
二〇二二年度
やさしい短歌講座……………13

ちのね俳句会……………27
苗句会……………28
すなおな句会……………28
まどの会……………30
若之の会……………31
佳日句会……………32
安里句会……………33
柳元句会……………34
二〇二二年度
やさしい俳句講座……………35

短歌編

野蒜短歌会

発足年 一九九九年
開講日 第三土曜日 午後
参加人数 九人

講師 石川幸雄

いしかわゆきお 昭和三十九（一九六四）年、東京都生れ。同人誌「開放区」に参加。休刊後、詩歌探究社「連」を結成。個人誌「晴詠」編集発行人。二〇一八年、日本短歌総研設立に参画。歌集に『解体心書』、『百年猶予』他、歌書（共著）に『誰にも聞けない短歌の技法 Q&A』、『短歌用語辞典 増補新版』、『短歌文法入門 改訂新版』などがある。十月会会員。

短歌とはいまより若きわがことを明日より若きわが詠うもの

石川幸雄

この岩の平らなところと海猫は決めて並びてみな風を見る

篠遠義子

そうだけど、コロナだから。と言いつのりできる暮しが終つてしまふ

関川歌代子

いつまでも初心者でいる気楽さを嘯みしめながらちぼち歩く

太田梅子

マスクして帽子をかぶり傘を持ちころばぬようにバス停へ急ぐ

野口亮造

見慣れたる赤き小さな自転車を乗せたトラック見送る四月

大室英敏

醒めた目で男はときに子を見るがどんな時でも妻は母の目

萩谷孚彦

水軍の誉れを胸に曾祖父の八幡丸奔る瀬戸の海原

桑崎公美子

聴覚の衰へしげく聞き返し聞き返しつつ咲き継ぐ立葵

山口とし子

ハイポーズ レンズ向けるが無表情電柱のごと立つお父さん

孫が来て二人になる我この四月新生活に気分もそぞろ

庭園の一人静を確か目にあつた咲いていた二人静も走りくる人をミラーに確かめてバスは黙つてその人待つ

歩みきし八十余年のあしあとの踊りて迫る回転木馬

やがて来る逃れられない死がよぎる友は水溜まり跨ぐがにゆく

ビートルズ聴きつつ思うあの日はピースを無くしたジグソーパズル

初恋の君に逢いたしバラのジャムあま味よ色香よゆれろゆれろよ

衣替え億劫がりてままならずいよよ古い坂下り始めしか

七十五の母の歳まで生きねばと念じ過ごせど杞憂となりし

吾が部屋に溢れるほどの陽の光射せるに気づく職退きし

山田恵子

引越しは一度きりなり婚の名の下に神戸は故郷となる

サルビアの会

発足年 二〇一六年四月

開講日 第三火曜日 午後

参加人数 十三人

指導 小島なお

こじま・なお 昭和六十一（一九八六）年、東京生れ。二〇〇四年、角

川短歌賞受賞。歌集に『乱反射』（現代短歌新人賞、駿河梅花文学賞）、『サ

リンジャーは死んでしまった』、『展開図』。入門書に千葉聡との共著『短

歌部、ただいま部員募集中！』。二〇二〇年度「NHK短歌」選者。日

本女子大学非常勤講師。コスモス短歌会所属。

繋いだりしないで星を D棟のひとつ開いている
夜の窓

小島なお

笙の音の夜の深まる薪能君寄り添ひて我の袖持つ

しゃぼんだまのしゃぼんのように思想犯の思想の
ようにあなたを好きで

炎天下民家の黒く濃い影にシュガーホワイト守られ
て咲く

糸田規代

風見鶏 兵士には背中がないと日傘のなかで教え
てもらおう

人も地も深く傷つくウクライナそれでもめぐる小麦
の季節

冬の日の水を湯に替え水槽の泥鱈はクーツとクレパ
スになる

高瀬浩子

選手村想定外の難題を煮る焼く揚げる五輪のかまど

猪又千鶴子

地ビールを横に並べて飲む子らを眺めて摘まむお節
二日目

なつかしき街や山々眺むれど親がいてこそふるさと
なのだ

後ろから詰まって遂に吾が席は講師の真ん前また指
されるぞ

手塚 崇

無の文字は有より多し何故に有無を言はせず般若心
経

小川明宏

通学の女子達の中のその人の視線は一瞬、手でつか
みたい

俺たちの散歩は今日も堀の上 空を近くに感じるた
めさ

中江麻祐子

母さんもブルーなときは顔あげて青空を見な 風の
伝言

モスクワのテレビ画面に乱入し「戦争やめよ デマ
信じるな」

林 璋

新宿の夜を華やぐニューハーフ紅あざやかなママの
だみ声

産み月の腹引きずって五月雨の藪へと消えしのら猫
コウメ

東 美保

「転移なし全部取れた」と電話くる貴女の好きなショ
ウブの季節

羽衣の揺らめく如き寒月光碧き世界の神秘に見入る

平田順子

信長公徳ぶ秀吉手植せし胡蝶侘助大樹となりぬ

夕食のうなぎを用意して来たと友がつぶやく今日は
丑の日

廣瀬令子

ここにいてここにはいない行間のどことはどこかと
盆東風に問う

披露宴皆んな弾けるコロナ禍の無い無いづくしを抜
けてたような

湊美恵子

箱根路をつないで走るこのタスキ仲間の為に自分の
為に

あさは畑ひるはテニスの友からのゴーヤのつくだ煮
ひざしが匂う

村上よし子

忘却は時の流れと言うけれど胸に染みこむ思いにと
まどう

約束に遅れて入る喫茶店本に夢中のあなたはいいね

山名暁美

ふかふかの落ち葉の山へ駆けてゆくキミの鼻先ひか
る冬の日

花水木の会

癸卯年 二〇一七年四月
開講日 第二日曜日 午後
参加人数 六人

指導 田村 元

たむら・はじめ 昭和五十二（一九七七）年生れ。一九九九年、「りとむ」入会、二〇〇二年「上唇に花びらを」で第十三回歌壇賞受賞、二〇一二年、歌集『北二十二条西七丁目』、二〇一三年、同歌集で第十九回日本歌人クラブ新人賞を受賞。二〇一八年、エッセイ集『歌人の行きつけ』、二〇二一年、歌集『昼の月』、『NHK短歌』二〇二一年度選者。

乾きたる土地に前方後円墳いくつか置けばかみつ
けの国

田村 元

そこここに到達点の碑が残る三陸の地をやつと訪うおとど 篠原よしみ

千両と万両の実の見分けかた言へばこころに赤き
実ともる

顔見えぬ電話は愚痴をこぼす母ビデオ通話で笑顔が
見える

若き日の食欲が時によみがへり薄目をあけて頼む
肉まん

震災は備えることしかできないが戦争ならば防げる
ものを

小一は逝きし友の名連呼するオリンピックに同じ名
見つけて

橘日出世

「無言の絵」語りしものが迫り来るしつかり見ます
しつかり生きます

石澤久子

鳥たちは何を話しているのだろうチチピッチチとに
ぎやかな朝

夕空に白き機体は次々と羽田に向かえり北の旅終え
廃屋にアカカラスウリ五つ六つ打ち出の小槌実まに潜
めるも

木と人はとても似ている 曲がるのも支える根っこが
見えないのも

川沿いにある日出会えし露のとうそつとしておく特
別な場所

中村直子

満月の輝き残す大空に螺旋描いて鳩の群れゆく

小畑嘉洋子

月頃の赤しそに染む梅の実に干してただよう酸味の
パンチ

ほの紅きマロニエ並ぶマンション前道ゆく人も華や
いで見ゆ

カーテンに光る朝日とひよどりに日毎早まる目覚め
の時刻

五つの輪ブルーインパルスのなせる技くつきり大き
く都庁上空

松浦恵美子

良いことが今年も少しはあったよね鏡の中の我に問
ふ朝

ふと名前呼ばれたような そよ風が桜の花を揺らす
歩道で

萩窪ときわ短歌会

発足年 二〇一七年四月
開講日 第一日曜日 午後
参加人数 七人

講師

内山晶太

うちやま・しょうた 昭和五十二（一九七七）年、千葉県生れ。
一九九二年より作歌をはじめ。二〇一二年、第一歌集『窓、その他』（六
花書林）を刊行。翌二〇一三年、同歌集にて第五十七回現代歌人協会賞
受賞。「短歌人」編集委員。「poet」「外出」同人。現代歌人協会理事。

折りたたみ傘のふくろが落ちておりそれはそれは
やすらかに疲れて

内山晶太

暗い中髪結い着付けをする君を明けゆく空が成人に
する

小峯俊子

きりさめの滞空終わるともなくていま呆然のなか
をゆくのか

木々の花リレー咲きにも季は急ぎ土の香りに芽ぶく
筈

鷹巢優子

すずしさと何か忘れてゆくことと境目のなき秋を
帰るを

暑き日の人^{ひと}気の失せし原っぱにカツコウの^{とよ}声響む夏
の午後

高橋正人

盆すぎてようよう開けし寝間の窓途切れときれに虫
の音渡る

北村章子

香り立つ一つ一つの花びらの金木犀の小さき十字

福田美紀

星屑はありてもなきに慣らふるにこよひ安達太良山
の星くづ

小林美代子

月一度つどひて語らふ友逝きて五月の雨にあぢさゝ
青く

流割章子

花 蕾 の 会

発足年 二〇二〇年四月
開講日 第二月曜日 午後
参加人数 十二人
通信添削あり

講師 生沼義朗

おいぬま・よしあき 昭和五十（一九七五）年、東京都生れ。一九九三年作歌を始める。翌年「短歌人」に入会し、二〇一七年より編集委員（選者）。歌集『水は襦袢に』第九回日本歌人クラブ新人賞、『関係について』、『空間』（第五十一回埼玉文芸賞準賞・第十六回日本詩歌句随筆評論大賞 短歌部門大賞）。日本歌人クラブ中央幹事、埼玉県歌人会理事。

昼過ぎに雨止みはじめ人びとは動きはじめるメル便もまた

生沼義朗

暮れ泥むの泥むをことさら靡かせて雨上がりの空に夕焼けは来る

行進のあらぬ行進曲聴こゆ智慧の光に照らされぬまま

ストーンミル 不思議な名前のマンションの玄関前に巨き石臼

上嶋玲子

胸元に埃纏わせ裸婦像立つ区役所前の駐輪場に

バナ指の手術を決めし夫は二つシウマイ弁当買って帰りぬ

アメリカにNOの一言が何故言えぬオミクロン染む沖繩の基地

佐倉清一

ほろほろと芝生に転がる百日紅 ホース手にした庭師の背中

関川歌代子

葉の色の半分ほどを白く染め半夏生その穂を立て始め

大きさを競いて胸のポケットにひっつけ遊びしせん
だん草の実

ぷすといふ音の聞こえる心地するワクチン注射の針の刺し方

中尾順一

非通知のスマホに残る着信の父の入院伝ふを知らず

泣きながら豆投ぐ子ゐて着ぐるみの鬼もとまどふ園の節分

岩かげにほととぎす白く咲きつぎて母なき庭の秋の深まる

中西京子

小正月は畳紙ひらき姿見に宝尽くしの帯を合はせる

新しき朝明けゆきて夫の立つ厨の音はさえざえと澄む

骨と身に解体するをショウと呼ぶ鮓は人気でイルカは不可か

橋本めぐみ

窓際にソーラー時計と豆苗を並べ眺める理系の夫

「物干しを二本抱えて出てやった」離婚を決めた従妹は笑う

「仏花ください」「謝恩会です」釜石の花屋はいろんな花で溢れる

森村利恵

西日さす音を聞きたり みつしりと藻のつく水車が
蕎麦屋にまはる

若松優子

ひとすぢの髪が「聖なるあきらめ」を説く古本には
さまれてをり

ひととゐてひとりのこころ隠しつつ飲む珈琲のかた
はらに水

花 集 会

発足年 二〇二一年四月

開講日 第二火曜日 午前

参加人数 十人

指導

花山周子

はなやま・しゅうこ 昭和五十五(一九八〇)年、東京生れ。一九九九年、

「塔短歌会」入会。歌集に『屋上の人屋上の鳥』、『風とマルス』、『林立』。

二〇二二年末、塔短歌会退会。現在、同人誌「外出」同人。

電気つければ照らし出されたカナブンがスパーク

しおりふとんの上に

日曜日の夜のコインランドリーに上履き硬い音立
てて回る

花山周子

十一月二十一日 二の西

西の市詣での習い幾十年小さな熊手に雨降り始む

じゃあまたね ハイタッチした孫の手の伸びやかな
指十三の春

小森谷栄子

たくさんのスズランテープ垂れているような夜風
が窓に当たり来

川風にたゆたふ船のレストラン エルベは赤き夕日
に染まり

『どん底』のセピアの歌集めぐりおり『ボルガの舟歌』
口ずさむ日

佐倉清一

秋空を見上げることく眠る犬をこの手に抱けば時は
とまれり

犬木桂子

十六年寄り添いくれし愛犬は秋の空へとひたすら眠
る

今朝のこと一声かけて飛び去った茗荷の葉裏に抜け
殻のあり

関川歌代子

去る鳥も来る鳥もある晩秋の梢に二つ木守柿見ゆ

春日満喜志

小銭なりとも現金ならば捨てぬのに使い捨てマスク
は道路に濡れる

アマゾンの飲み水奪いしアボカドの緑あざやか朝の
サラダに

芹澤弘子

サラウンドステレオとなる蝉声の真中に夏をただ立
ちつくす

心病む友への文をとペン取れど深井戸覗く思いに止
まる

本橋正敏

亡き母の濃紫の着物着て鏡の中へ謝りたきこと

林摩利子

オーディション「歩いてみて」に深呼吸モデル歩き
の六十男子

幼子の日々は短くこんなにも愛されたこと忘れてし
まう

藤井公子

施設へと母送る時故郷の土手には桜白く揺れおり

山下幸子

握手して別れしあの手のぬくもりがいまだ残るに訃
報の届く

藤井公子

母の古き着物の匂いがしたようで見渡す五月の車内
静けし

二〇二二年度

やさしい短歌講座

発足年 二〇二一年四月

開講日 第一火曜日 午後

参加人数 十人

指導

平岡直子

ひらおか・なおこ 昭和五十九（一九八四）年生れ。長野県出身。
二〇〇六年に作歌をはじめ、二〇一二年に第二十三回歌壇賞受賞。
二〇二一年に歌集『みじかい髪も長い髪も炎』を上梓。同歌集で第
六十六回現代歌人協会賞を受賞。現在「外出」同人。

近所しか歩いていない 秋がきて蹴鞠のような陽
射しのなかを

平岡直子

紫陽花のほかのすべてがモノクロのわたしの人生
は点つなぎ

暖の無く食も乏しく声寂し 難民の地にまた春が来
る

松本義彦

西友の野菜売り場で目をとじる 光れすべてのビ
タミンCよ

青梅の赤塚不二天館を訪れて詠める
館内に「それでいいのだ」の声満る 八十路の我に
充填したき

第十二回 二〇二二年三月一日
宿題「声」

中国では三月より九十万円以上の金の出所、金の使い道を銀行に登録することになるとのニュースで詠める

銀行で金の出し入れ管理され声なき民は如何にするらむ

おかあさんごうごう言っているなんだろう？

あれは川鳴り春告げる音

田中真理子

窓越しに小学生の声が行く

そろそろ起きるか予定はないが

重たく入り込むようなラップを耳に空を飛ぶ孤高に

彼は

蝉の声もの悲しげに聞こえれば夜には虫が賑やかな

秋

香取真実

赤ちゃんの泣き声だけで聞き分けるこれにはかなり

経験がある

うるさいと言われてしまう日本では子どもの声に冷

たい日本

うたた寝の窓の日差しは春めきて垣根をわたるさへ
づりを聞く

中西京子

日々吸って生きる空気と人の声その温もりは町の体
温

山内恵美子

その人の声に癒しを感じつつ電話の話とりとめも無
く

朝起きて最初につけるラジオから求めているのは

ニュースそれとも

「はいはい」と電子レンジに答えてる一人暮らしに同
居人達

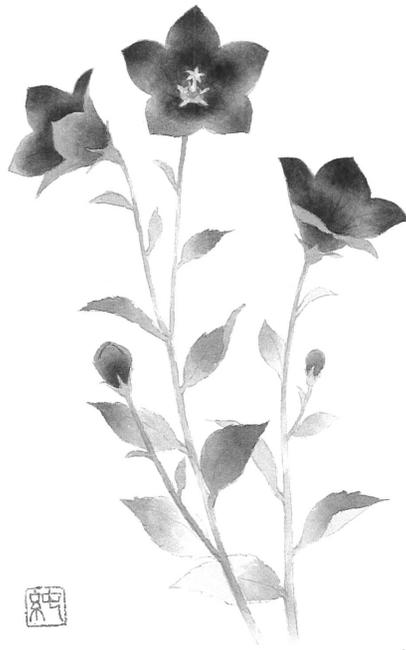
青木江美

リフレイン頭の中で鳴り続くこの歌止めてサービス
マニユアル

吹き替えのシリーズ見続け肉声を聞きたくもあり聞
きたくも無し

※二〇二三年四月より、平岡直子さん指導の「なおの会」が発足しました。

俳句編



花芭蕉俳句会

発足年 二〇一〇年四月
句会 第二木曜日 午後
参加人数 八人

指導 俵木陶光

たわらぎ・とうこう 昭和七（一九三二）年生れ。かつて「馬酔木」に参加。角川詩歌館開館と同時に花芭蕉俳句会を立ち上げる。「言葉はやさしく、思いは深く」がモットー。また杉並区制八十周年を記念し区と協力し「すぎなみ詩歌館かるた」の作成者ともなっている。

注射針じつと見てゐる秋の雨 俵木陶光

冬 薔薇 波 風 高き 東京湾

冬夕焼追はれて早き帰り道

単線をすいすい走る花菜風 今井真知子

春夕焼一日の終り伸ばす背に

梨畑継ぐ人なしの便りあり

綾取りの糸のもつれて冬紅葉 大本睡杏

絵の具の蓋転がつてゐる枯野かな

ガラス器に一片残るパセリかな

折りたたむ傘の青さよ九月来る 大本恵子

大鍋に汁のたぎりて走り蕎麦

蓋とれば湯気の向こうの冬紅葉

天高く浮雲遊ぶ九月かな 小森谷栄子

芭蕉葉やそよとも揺れず日を溜めて

ゆるゆると鯉群れ泳ぐ寒の明

欄干に肘つき眺む残花かな 中川路邦子

晩秋や十歩先行く夫の影

神留守の丹沢山地静まりて

新しきカンバス肩に夏野行く 中崎啓祐

柿若葉くつきり伸びる生命線

縄文の竪穴黒き春の土

花残る一年生の良き返事 吉田圭人

銀コップ歯医者窓に夏の空

晩秋や夕餉の椀の山の幸

句歌詩帖草藏

癸卯年 二〇一〇年四月
開講日 第一土曜日 午後
参加人数 七人

指導 佐々木六戈

ささき・ろくか 昭和三十(一九五五)年、北海道生れ。俳人・歌人。
作歌から始め、一九九二年、俳句結社「童子」に参加。二〇〇二年、句
歌詩帖「草藏」、十九年「艸」創刊。第四十六回角川短歌賞。著書に『佐々
木六戈集』(セレクション俳人)、『佐々木六戈集』(セレクション歌人)、
『佐々木六戈詩集成』。

天地これ蜜蜂の働きに負う 佐々木六戈

経帷子をかげろうの糸で織る

しだらでん以降音沙汰無きが今

聖廟に寒き鼎の据ゑてあり 葎澤美絵子

絶版となりしは亀の鳴く頃か

端居せる閑人の耳聴きこと

獵人の眼光静まらぬままの 鳴奈千

抱へきし絵本に春の額を触れ

シネラリアこの街確と眼裏に

春の蠅浦島太郎読み聞かせ 荒井八雪

人泊めて博文荘の貝の雛

耳聴くなる芹の水跳びてより

礼をもて冬天に立つ孔子木 かとうさきこ

春寒の尾骶骨より立ち上がる

花董折れてはならぬ芯持てり

初声に絞り出すかな懇一句 小山千秋

パンジーの苗くらくらと日のあたる

陽炎の高き高きへ手を伸ばし

眉ひきて年玉の額決まりけり 山内こころ

春の風コチライヒンカイシユウシヤ

実桜を落とすまで鳴け鳥どちよ

雪雫卵を割れるやうになり 山田やよひ

しやぼん玉追いかけて追いかけて迷子

啓蟄の靴を履かせてやりにけり

幻戯会

発足年 二〇一〇年七月
開講日 第二・四金曜日
午前
参加人数 十七人

指導 鎌田 俊

かまた・しゅん 昭和五十四（一九七九）年、山口県生れ。千葉県在住。
「河」副主宰兼編集長。句集『山羊の角』。

陽炎と朧を喰うて存へむ 鎌田 俊

白檜曾の匂ふ山雨や父の日来

中年の烏柄杓でありにけり

兄病みて胡桃の部屋の薄灯り 朝倉さき子

さよならを聞きたくなくて潜る毛布

ジョーカーはすでに二周目お元日 穴井悦子

梅の香やアダージョでゆく車椅子

断捨離のガレージセール風薫る 石黒和紀

ビル谷間我が物顔の春一番

郭公の声をひろげて奥信濃 井出智恵子

押花の根の強かに芙美子の忌

柿落葉母の帰りし天の奥 小川明宏

巡礼の棒ひとつゆく冬野かな

野遊びのコンビニで買ふカレーパン 尾沢久美子

阿佐ヶ谷のジャズフェス遠し青時雨

蝨斯ぽつと機屋に灯の入りぬ 北原孝子

ひと雨に梅のよそほふ速さかな

雪明り記憶の扉開きくる 小池はる子

チェンソーの音に煽られ凧揚がる

陽に翳し葉脈夏の地図となる 笹本礼子

雲梯のカーブ冷たき空の青

時間とふ妙薬のあり鳥雲へ 下平紀代子

白木蓮白以上白以下でなし

改札に子等の迎への良夜かな 高橋 實

一片の雲一山の花の雲

なんとなく歳を重ねて柿を食う 富田 宏

絶筆となるやもしれぬ確定申告

春近し古民家カフェに睡る猫 野村宣子

父祖の地にふんばっており軒氷柱

玄室のミイラに持たす種袋 林璋

春光や千の乳房のアルテミス

年用意輪島の塗の厚みかな 平田順子

古い猫と老いるも仕事去年今年

朝練は兎跳びから菊日和 吉井雅子

語り継ぐ亡父の出征冬林檎

鴨川の床の小唄やはじき豆 吉田武子

がうがうと春の光の鳴門かな

萩窪句会

発足年 二〇一二年六月

開講日 第一木曜日 午後

参加人数 十五人

指導

日下野由季

ひがの・ゆき 昭和五十二(一九七七)年、東京都生れ。俳誌「海」編集長。

第十七回山本健吉評論賞、第四十二回俳人協会新人賞。句集『祈りの天』

『馥郁』。俳人協会会員、日本文藝家協会会員。

藍浴衣さらりと水のごとく着る 日下野由季

銀漢や産み終へてわれ身ふたつに

言い出せぬままに別れて革手套

新茶汲む父の残せし九谷焼 本山公雄

カーテンの帆となり初夏の風を恋ふ 大川千草

今年竹身の丈ほどに伸びにけり 島野秀教 二〇二二年六月

夢一つ蚩袋に灯りけり 大川千草

亀鳴くや曜日違へて来てをりぬ 池田絵里子 二〇二二年四月

新しく組みし竹垣風薫る 早瀬梢

花筏海へと続くこと知らず 増田公治

十葉の花や懺悔を迫り来る 増田公治

竹割つて素麺流し生まれり 大川千草 二〇二二年七月

薫風や如来のおはす深大寺 早瀬梢 二〇二二年五月

繁る葉に隠れし姫か合歡の花 白井晴男

ネットクレスするりとはずす月見草 池田絵里子

星々のこぼれんばかり天の川 島野秀教 二〇二二年八月

奥多摩の谷を跨ぎて天の川 木山正義

すいとんて何と聞かるる終戦日 大川千草

かたまつて薄き秋草風にゆれ 野口芳枝 二〇二二年九月

通らねば消えてゆく径芒原 大川千草

コスモスも私も写る道路鏡 清水せつこ

外つ国の固き林檎を噛みにけり 島野秀教 二〇二二年十月

惜しみなく木の実こぼるる聖母像 大川千草

どのひと葉と同じ色なし柿紅葉 本山公雄

千歳飴持たされて立つ写真館 池田絵里子 二〇二二年十一月

葡萄棚枯れて青空戻りけり 大川千草

書きかけの手紙の余白冬日差す 白神真理

かつかつと生牡蠣割つて差し出され 大川千草 二〇二二年十二月

出羽三山神に抱かれ眠りけり 本山公雄

冬木の芽病院食を完食す 池田絵里子

万両の実のおのおのの輝けり 島野秀教 二〇二三年一月

書初めの海の一文字波の音 大川千草

ねんごろに母の伝えし雑煮炊く 國松ひさ子

主治医より完治の言葉春隣 池田絵里子 二〇二三年二月

病室の妻の髪梳く春隣 木山正義

梅まつり陶の狸のよく売れて 大川千草

握手して卒業生を送りけり 木山正義 二〇二三年三月

母と子の数字遊びや犬ふぐり 水川怜子

ジヨギングの後追う仔犬春の土 増田公治

青丹会

癸卯年 二〇二二年十月
開講日 第一日曜日 午前
参加人数 十七人

講師 林 誠司

はやし・せいじ 昭和四十(一九六五)年、東京都生れ。句集『ブリッジ』
「退屈王」。第二十五回俳人協会新人賞。俳句総合誌「俳句四季」「俳句界」
編集長を務め、現在、「俳句アトラス」代表。俳句愛好誌「海光」代表。

てふてふの花にやどらむ出荷前 林 誠司

竹の子の竹より太く出でにけり

ぞんぶんに海あたたまり花大根

柿落葉良き人生のメダルとす 榎本ジミー

いつもの日その大切さ冬景色

雷鳥や子は子の丈の草をもぎ 小久江冨秀

名も知らぬ鳥をかくした柳かな

良いこともあつた気がする雪女郎 木村 凡

蛩こい御魂乗せずに蛩こい

ふるさとの川は饒舌旅初め 齊藤保志

水に寝て雲になりきるプールかな

暁け星や海に沿ひ行く徒遍路 篠原賢二

残り日も押し込まれたる落葉籠

生きる気の十年連続日記買ふ 関口下枝

畳屋の生活の針も納めたり

磨き上ぐ夫の墓石に風光る 田川嘉子

雪柳こぼれし後も美しき

五右衛門風呂ごちそうさまと雪女郎 田中久仁子

春田引く俺の鼓動と野の鼓動

薬や子の意志親のままならず 富永志保子

潮香る店の目刺の青き藁

みちのくの一重まぶたの雪女郎 中尾和香子

猫の恋法話一瞬途切れたり

胸そらす大白鳥や逆さ富士 平山 寛

実朝を尋ね鎌倉花木権

廃屋に射し込む光枇杷の花 本間ひらぎ

春の海一筆箋をとり出せり

空の青白寿を祝ふ冬桜 水川伶子

オール上げすれちがう時風光る

蒸し浅蜷酒に開かぬ口のあり 村田みね子

炎昼や検診に鳴る空きっ腹

壇上の頬のももいろ風光る 矢島くみ

のらぼうといふ菜を摘みて彼岸西風

蝉生まる第一声に力あり 山田和子

一病に失う半生 蝉時雨

冬晴やどこかでふとん叩く音 吉岡七五三

夏蝶や坪庭の隅水飲み場

くるり

発足年 二〇一三年四月

開講日 第三木曜日 午前

参加人数 八人

指導

野口る理

のぐち・るり 昭和六十一（一九八六）年、鳥取県生れ、徳島県育ち。瀬戸内寂聴の文学塾に参加。高校時代に俳句をはじめ。平成二十三年、神野紗希、江渡華子と俳句ウェブマガジン「スピカ」創刊。同年、『俳コレ』『天の川銀河発電所』入集。句集『しやりり』。

寅年のマフラーぐるぐるぐる巻き

野口る理

麦秋や窓辺の突つ張り棒斜め

老らくの恋のけだるさ黄薔薇散る 柴田ふらり

青蚊帳や魚となりて微睡みぬ 原田美穂 二〇二二年五月

てつぺんはいくつもあつて青とんぼ

体より光・発して昇る鮎 若林冴え虎

卵波来るちゃんと食べてるか気になる 加藤エコ

一面の菜の花恥かしくないの

吉田ヨシ子 二〇二二年四月

七重八重山吹の葉の丸い雨

木田捨て助

新樹光クミン香らせキッチンカー 柴田ふらり 二〇二二年六月

横着な後継ぎよりも黄雀風 若林冴え虎

ドラキュラのように目覚めて髪洗う 原田美穂 二〇二二年七月

文明はかく脆く蛇穴を出づ

原田美穂

はればれと夏座布団の四角形 木田捨て助

噴水も止り緊急事態中 若林冴え虎

オリーブの紫黒瀬戸内海の青 加藤エコ 二〇二二年九月

稲妻にああラッキーと叔母の顔 若林冴え虎

黒葡萄一粒ほどの後悔と 原田美穂

稲妻や創造主は血管浮き立たせ 柴田ふらり

髪刈りて老人夏を迎えうつ 石田 磬

敬老日ブラックコーヒーみたいな日 吉田ヨシ子 二〇二二年十月

背な丸くよたよたの母秋惜しむ 若林冴え虎

君はまだ選挙に出るか栗おこわ 石田 磬

我が内の嵐は月にくれてやる 吉田ヨシ子

長生きの姉へ地卵アマリリス 木田捨て助 二〇二二年十一月

冬董青き地球の溶けるまで 原田美穂

大晦日ブエノスアイレスでタンゴ 吉田ヨシ子 二〇二二年十二月

着ぶくれの力強さの我孫子坂 木田捨て助

時雨るるや中華弁当抱くように 加藤エコ

入浴剤多めに入れて大晦日 加藤エコ

手袋に五つの不幸閉じ込めて 石田 磬 二〇二二年一月

乗り降りのほとんどなくて雪が降る 木田捨て助

老犬をそつと地に置き青き踏む 柴田ふらり 二〇二二年二月

囀の二羽の愛語を憶測す 加藤エコ

春朧死んだ時間が紛れ込む 吉田ヨシ子 二〇二二年三月

花吹雪嘘八百を吹き払え 石田 磬

牡蠣も無事安堵の声が耳になお 石田 磬

スナメリ句会

発足年 二〇一三年十月
開講日 第一木曜日 午前
参加人数 十三人

指導 高柳克弘

たかなぎ・かつひろ 昭和五十五（一九八〇）年、静岡県生れ。「鷹」編集長。第十九回俳句研究賞、第一回田中裕明賞、第二十二回俳人協会評論新人賞、第七十一回小学館児童出版文化賞。句集『未踏』『寒林』『涼しき無』。評論集『凜然たる青春』『どれがほんど？ 万太郎俳句の虚と実』『究極の俳句』など。

きちんと蒲団重ねてホームレスの留守 高柳克弘

求人誌笑顔まみれや四十雀

囓へるか電柱を打つ啄木鳥を

落第す胸の窪みのあれこれや 伊狩七重

落第す母明るくて雨の葦

落第のよく食べ足の長いこと 木田和子

たんぼぼや長縄跳びへ容るリズム

食卓の落第告る封書かな 鈴木洋子

マスクとれば鏡の顔の砂漠めき

トマト好きおやつにつまむプチトマト 関根陽子

硯海に墨たっぷりと涼新た

裸木や朝日背にして枝広げ 竹内静江

透き通る紅茶とシヨパン雪催

若冲の鶏の飛び出す熱帯夜 近田吉幸

鍵外す音のやわらか凍ゆるむ

春昼やピザのあれこれ三世帯 二見明子

新涼の琉球グラス手で洗う

暮れてなほ風の街なり五月病 福田健太

昼寝覚鏡中のふとなつかしき

拍手に寒梅ひらく時を待つ 宮川真弓

菜の花を見据える先に海もある

入社の日と同じ花愛で退職す 持田育司

独り聞く去年の二人の除夜の鐘

冬空に花芽残すや庭手入れ 山口美智子

犬だきて無言の背中落第子

くちなしに錆なくもがな姉嫁ぐ 山本和子

酔顔の父の遺影や今日の月

泉句会

癸卯年 二〇二四年四月
開講日 第二火曜日 午後
参加人数 十人

指導 今泉康弘

いまいずみ・やすひろ 昭和四十二（一九六七）年、群馬県生れ。高校時代から句作。「円錐」同人。第二回俳句空間新人賞、第十二回山本健吉評論賞。評論集『人それを俳句と呼ぶ』、評伝『渡邊白泉の句と真実』。

人間を焼く白菊の中に焼く 今泉康弘

放生の指を離れぬ蛭かな

石路や咲いて裏庭明るくす 広松明子 二〇二二年十一月
立冬の舗道鳩顔うずめをり 藤本ミツ子

青と黄の風船を手に逮捕され

黄落をたどりてゆけば西へゆく 松井宏文

沈丁にマスクをすこしずらしけり 松井宏文 二〇二二年四月

大皿に一片の散り紅葉かな 藤本ミツ子 二〇二二年十二月
木枯しや声も言葉も風が切り 早出和子

アクリルに汝が春愁の右の顔 大本伸彰 二〇二二年五月

河豚刺しや皿の網目の透けて見ゆ 松井宏文

柿若葉三日見ぬ間に大人びて 早出和子 二〇二二年六月

寒雲が写真のごとく止まっている 今富由起子

白靴を脱げば葉山の砂の粒 大本伸彰 二〇二二年七月

心意気溢れる賀状虎駆ける 早出和子 二〇二二年一月

入江ごとたがふ響や夏のあさ 伊狩七重

虎千里我四千歩 初詣 藤本ミツ子

しだり尾の長さもてあます金魚かな 伊狩七重 二〇二二年八月

焼き芋屋勢い付けて包みたり 西山慶子 二〇二二年二月

秋雨や永遠に床屋のねぢり棒 大本伸彰 二〇二二年九月

母は逝き我此処にをり冬の街 藤本ミツ子 二〇二二年三月

長袖に着替へてよりの秋思かな 大本伸彰

冴返る軍靴の凍土砕く音 穂坂てる子

木槿咲く屋根は防水工事中 三由雅子

風船は良き子のやうに従ひ来 矢野美智子

光る目のひそみてをりぬ萩月夜 松井宏文 二〇二二年十月

俳句鶉の会

発足年 二〇一四年十月
開講日 第一火曜日 午前
参加人数 八人

指導 鶉田智哉

ときた・ともや 昭和四十四（一九六九）年、千葉県生れ。平成八年「鳥座」入会。終刊後十九年「雲」入会、退会后二十七年同人誌「オルガン」参加。句集に『こゑふたつ』『凧と円柱』『エレメンツ』。第十六回俳句研究賞、第二十九回俳人協会新人賞、第六回田中裕明賞。

おほまかな身ぶり泉のあたらしく

鶉田智哉

向日葵はてんでに横を向いて咲き 仁科祥子

へうたんを隣に置いて見失ふ

鰯雲我家への道ますぐあり 伊狩七重 二〇二二年十月

逃水が眩しアプリの立ちあがる

灰色の二羽のこどもも渡り来ぬ 矢野美智子 二〇二二年十一月

なみなみと逃水の見ゆ二号線 矢野美智子 二〇二二年四月

半地下の蛇屋に溜まる枯葉かな 松井宏文

放射状大きな花にチューリップ 仁科祥子

芽キャベツのばきつと取れて穴深き 矢野美智子 二〇二三年一月

蚕豆の莢をぎつつとねじあける 三由雅子 二〇二二年五月

放課後の空ひろびろと落葉焚 松浦恵美子

茹であがる蚕豆にいくつもの手が 田本道江

轟轟と燃ゆる焚火や海動く 伊狩七重

新樹より雀のこぼれつづけをり 松井宏文 二〇二二年六月

水仙をかたまりとして見る岬 松浦恵美子 二〇二三年二月

毛虫這ふ桃の木ともに家売れり 田本道江

春浅きビシヤリと閉まる自動ドア 木下周子

枇杷のそば鴉たびたび飛んで来し 三由雅子 二〇二二年七月

線香の煙に沿いて臥竜梅 木下周子

でで虫のつののほとばしり出でたり 矢野美智子

ちのね俳句会

癸足年 二〇一六年四月
開講日 第四火曜日 午後
参加人数 十一人

指導 茅根知子

ちのね・ともこ 平成十(一九九八)年「魚座」入会、俳句を始める。
二〇〇一年 第十五回俳壇賞。「絵空」同人、俳人協会会員。句集『眠るまで』『赤い金魚』。

鳥の巣を見にゆく思ひ出しながら 茅根知子

集団に馴染めぬ日あり枇杷の花 二〇二二年十一月

毛虫焼くフルーツ牛乳の匂ひ

電柱の天辺途方に暮れる蔦 山村笑流 二〇二二年十月

見えてゐる底に清水の揺れどほし

笹百合や背の高き姉帰り来ぬ 二〇二二年四月

万緑や動画で届く初歩き 佐藤とみ子 二〇二二年五月

素つぴんに眼鏡とマスク銀座まで 二〇二二年一月

分裂と結合愉し芋の露 二〇二二年八月

観覧車一周ぶんの秋景色 紺野果倫 二〇二二年九月

覚えなき会釈を返す菊日和 竹内ゆき 二〇二二年十月

暗いニュース忘れて電気毛布かな 二〇二二年十二月

一山の小さくなりて冬紅葉 二〇二二年十一月

若草に紙飛行機の着陸す 高木らら 二〇二二年四月

春昼的一幕をついうとうとし 山口汀子 二〇二二年四月

秋の海会ひに行きたき人遠く 二〇二二年八月

諍ひはココアに溶けて春隣 二〇二二年一月

さんざめきやがて淋しき鳴子かな 柘植みつよ 二〇二二年九月

身の丈に合ふ夢をもち髪洗ふ 浅野純子 二〇二二年五月

横笛のおさなき指や春まつり 二〇二二年三月

苗句会

発足年 二〇一七年四月
開講日 第三火曜日 午前
参加人数 十五人

指導 鶴岡加苗

つるおか・かなえ 昭和四十九（一九七四）年、広島県生れ。「香雨」同人、編集担当。俳人協会幹事。句集『青鳥』。第二回俳句四季新人賞、第三十八回俳人協会新人賞。

明け方の雨の染み入る石路の花 鶴岡加苗

帰りまた川に沿ひゆく花疲れ

粽解くくるくるうごく子の瞳

遠足や初めて話すクラスの子 宇田川勝実 二〇二二年四月

八重桜積もりて庭に回廊に 高津美子

便箋をひらく指先風薫る 笹川玲子 二〇二二年五月

回覧に至急の朱書き夕薄暑 吉見布美子

羹のひとつ加はる夏料理 古川 運 二〇二二年七月

猫じやらし揺らして歩く傘の先 重田春子 二〇二二年九月

手賀沼の空の広さや鰯雲 瀬戸久美子

秋の朝真白き皿にジャムを添へ 角川真知子

ゑのころや廃墟に風の通り径 宮永民男

明日伐る櫂にリボン鰯雲 丸山ゆき子 二〇二二年十月

住む人の無き生家にも秋深し 春日満喜志 二〇二二年十一月

冬ざれや海にかたむく北斗星 小山優子 二〇二二年十二月

寒月や東京駅を見下ろして 古川民江

裏山の空まさをなる霜柱 福井信子 二〇二二年一月

すなおな句会

発足年 二〇一九年四月
開講日 第一金曜日 午後
参加人数 十一人

指導 橋本 直

はしもと・すなお 昭和四十二（一九六七）年、愛媛県生れ。神奈川大
学非常勤講師（俳句研究）。「豈」同人。現代俳句協会参与。合同句集『水
の星』『鬼』、句集『符籙』。

二等辺 三角形や鱈フライ 橋本 直

蝙蝠の蜘蛛に喰はるる御嶽かな

黒白は低きに澱み鷹渡る

ちる桜みなに喜び振りかけて 石澤久子 二〇二二年四月

喜びは胸のあたりに春の服 戸田年昭

若緑渡る風音ジャズめきて 伊賀まゆみ 二〇二二年五月

見上げてたサボテン家と消えた初夏 福永泰子

猫のひげ引つ張つてみる目借時 吉井雅子

空豆の莢の焦げ目や皆既蝕 赤坂奈緒 二〇二二年六月

銭湯の高窓淡き梅雨夕焼 角川賢二

藪を出ではたらく細胞梅雨の蝶 戸田年昭

貸ポート恋人も貸してくれぬか 赤坂奈緒 二〇二二年七月

カーフェリー島まで眠る浮輪の子 吉井雅子

子供等とまづはひと吹き浮袋 角川賢二 二〇二二年八月

崖線に続く足跡こぼれ萩 戸田年昭 二〇二二年九月

秋時雨玉虫厨子暗くなる 伊賀まゆみ 二〇二二年十月

色鳥や双子の眠るベビーカー 吉井雅子 二〇二二年十一月

数へ日や泡たつぷりに犬洗ふ 春藤千恵 二〇二二年十二月

深爪も少しのびきて小正月 角川賢二 二〇二二年一月

おしゃべりなインコあるらし梅ふふむ 春藤千恵

とこしへの絵踏なき世を祈りをり 壽恵村晴夫 二〇二二年二月

秩父峰の淡きやまなみ春立ちぬ 角川賢二

冬空に夫の蘊蓄城高し 博多信子

屋根替へし弁財天や風光る 春藤千恵 二〇二二年三月

啓蟄の大地をうがつか杭打機 角川賢二

啓蟄や初乳をさぐる赤ん坊 吉井雅子

コロナ禍初期からネットを利用し、途切れることなく活動してきました。

現在は対面句会とネット句会システムの夏雲を併用。投句・選句まで夏雲で
完了させ、会場では各句の鑑賞や質問、先生からのアドバイスや添削などをい
ただく時間をたっぷりとるようにしています。

まどの会

発足年 二〇二〇年四月
開講日 第三土曜日 午前
参加人数 八人

指導 田島健一

たじま・けんいち 昭和四十八（一九七三）年、東京都生まれ。「炎環」同人。
同人誌「豆の木」「オルガン」所属。句集『ただならぬほ』。

白鳥がくる死火山の死の理由 田島健一

重ねると梟を呼びよせる歌

みなみかぜより南から戦闘機

炎屋や造花をつけたひとのゐる 松井亜衣

解体の音や秋の園はひろく

犬の毛のころがつてゆく月見草 福地 敦

ほんたうをこの桜貝だと思ふ

教会の屋根みどりなり菜種梅雨 橋本めぐみ

秋の夜や引越しの子の皿を選ぶ

お揃いの簪あたま曼珠沙華 亀山和子

葉の上にブローチひとつ蝸牛

秋高し縮れし赤子胸に迎え 片岡真裕子

原爆忌歪んだままある硝子瓶

雨月なり行方あやなき鈴ボール 大友まりえ

あんぱんの空洞広し神の留守

予報図や胡瓜三本探す主夫 大塚 勇

鉄からこぼれ落ちるや海苔の粉

空蝉や樹皮に喰ひこむ爪の先 生島 融

巢籠りの窓のうつろひ遠桜

若之の会

発足年 二〇二〇年四月
開講日 第四月曜日 午後
参加人数 十一人

指導 福田若之

ふくだ・わかゆき 平成三(一九九一)年、東京都生れ。「群青」「オルガン」に参加。句集『自生地』『二つ折りにされた二枚の紙と二つの留め金か』らなる一冊の蝶。第六回与謝蕪村賞新人賞。

ちくわぶを食む底抜けの寒空に 福田若之

ほとんどずっとマナーモードで野にも遊ぶ

雲に翳りやがて月下の苔の花

島を発つ十五の春の太き眉 吉原京子 二〇二二年四月

三度めに子鴨や堰を上りきる 柴谷悦子

通院の心ほぐるる初音かな 藤掛紀子

藤垂るるレマン湖畔を栗鼠走る 岡部義信 二〇二二年五月

絵日記は神の時間や夏休み 岩石むそむ

近づけばたちまち噤む葎雀 佐藤なつ 二〇二二年六月

帰る郷持たず螢も見ぬままに 岩尾伎三江 二〇二二年七月

甘酸っぱい樹液酒場や秋の蝶 佐藤なつ 二〇二二年八月

宅配の箱に入谷の夏の市 岡部義信

月餅を茶のともにして今日の菊 藤掛紀子 二〇二二年九月

儂きは音の記憶や新酒汲む 吉原京子 二〇二二年十月

黒塗りの公文書あり文化の日 岩石むそむ 二〇二二年十一月

裸木となりて槐の男振り 岩尾伎三江 二〇二三年一月

壺焼きのふきこぼれては匂ひたつ 柴谷悦子 二〇二三年二月

積雪二センチに雪だるま二体 土居隆峰

三楹の花ぼんぼりのごと咲ふ 土居隆峰 二〇二三年三月

佳日句会

発足年 二〇二一年四月
開講日 第三日曜日 午後
参加人数 十二人

担当 宮本佳世乃

みやもと・かよの 一九七四（昭和四十九）年、東京都生れ。「炎環」
「オルガン」「豆の木」所属。句集『鳥飛ぶ仕組み』『301号室』。第
三十五回現代俳句新人賞。

はくれんの坂のゆるやかなる朝よ 宮本佳世乃

幼子の内股歩き金魚草 藤川久美子 二〇二一年八月

日曜はまぶしき菊の塞ぐ墓

父の死を母は忘れて大花野 小澤俊彦 二〇二一年九月

柄物の印度の人と泥鰌掘る

別の世を生きる老女や穴惑ひ 田口直哉 二〇二一年十月

酔ひどれの態して花を惜しみけり 近藤俊子 二〇二一年四月

人波に紛れてそつと日記買ふ 近藤俊子 二〇二一年十二月

カーネーション机上の旅はふたりづれ 木下周子 二〇二一年五月

冬晴れの歌声はケアハウスより 橋本めぐみ 二〇二一年一月

蛇およぐ川や商店街の先 大矢聖子 二〇二一年六月

蝶よ舞え翠のさなぎ白に替え 西山八重子 二〇二一年二月

端居する父の背中に物申す 大本恵子 二〇二一年七月

サイケなるジャンパーを着て春の雨 高城カツ子 二〇二一年二月

炎昼や静まりかへる街しろし 窪 龍子 二〇二一年七月

安里句会

癸卯年 二〇二一年四月
投句締切日 第四土曜日
参加人数 十一人

指導
安里琉太

あさと・りゅうた 平成六（一九九四）年、沖縄県生れ。「銀化」「群青」
「誹」同人。句集『式日』。第四十四回俳人協会新人賞。

旗の日のぼいぼい鯉の釣れにけり 安里琉太

月渡るあたりの晴れて配餅

彼岸会や雨をよろこぶ犬の舌

草の芽やいよいよ狭き猫の道 松浦榮子

籠底のしをれ蓬も芳しき 河合信之

西方は星少なくて冷し飴 荒山洋子

指笛の遠く響いて盆の月 吉原京子

柚子坊や食べ残したる葉の骨を 小山 茂

茸狩りや青き樹林に魅せられて 岩石むそむ

一匙の星屑降りぬ天狗茸 渡邊文雄

ぷかぷかと頭のぞかす茸汁 内藤浩美

花八つ手駐車違反のステッカー 杉本典子

初雀空のまほらの点となり 斎藤雅一

大海へ堰切る流れ松の明け 岸上みち枝

柳元句会

発足年 二〇二一年四月
開講日 第二土曜日 午前
参加人数 十一人

指導 柳元佑太

やなぎもと・ゆうた 平成十(一九九八)年、北海道生れ。「澤」同人。
短詩系ブログ「帚」に参加。第二十三回山本健吉評論賞。

地球史に人類短蚊を打てる 柳元佑太

夏の夜の海の底を貝の徒歩

文明は塔を欲り草いきれ

番ひにて咲く源義の愛でし梅 河合信之

甘えんぼアウンとタタタ猫の春 小山茂

先頭は吾子の鉄琴風光る 斎藤雅一

稚児のひざ摩り呪ふ桃の花 吉岡裕子

速達が届いて目借り時の月 大熊光汰

打ち水や親戚揃ひ僧を待つ 松浦榮子

山霧の濃き影となり鹿と会ふ 岸上みち枝

モボモガが闊歩せし街鴉の昼 岩石むそむ

煮凝や海の底にも深き溪 荒山洋子

日記買ふ未来十年の時を買ふ 渡邊文雄

筆始ひらがなだけの練習帖 杉本典子

二〇二一年度

やさしい俳句講座

発足年 二〇二一年四月

開講日 第四日曜日

参加人数 十三人

指導 西村麒麟

にしむら・きりん 昭和五十八（一九八三）年、大阪市生れ、高校卒業まで尾道市で育つ。江東区在住。「古志」同人。句集に『鶉』『鴨』。第一回石田波郷新人賞、第五回田中裕明賞、第七回北斗賞、第六十五回角川俳句賞。

萩の花小さき息をしてゐたり

西村麒麟

鉛筆で描く白萩も紅萩も

この店によき退屈やおでん酒

公魚の顔の女やスマホの灯

ファックスで届く訃報や冬の星

春愁や写真の中のセーヌ川

翹光る海拔二千オニヤンマ

芒原 光のつぶが空をとぶ

井上じろ

大澤久美子

小日向速雄

金子三佐子

角取明子

風ぐるま風を探りて手を伸ばし 久保田桃子

投げ入れて蕾重たき桔梗かな 酒井圭子

猪狩られその一頭分山軽し 桜井恵子

恋猫の眼はランランと振り向きぬ 瀬下純子

梅ふふむ開花待つ間の古本屋 津田麻紀子

長谷寺の長き登廊や冬桜 村上恵子

山萩よ天下の秋を知ってるか 樫山紀子

天金の硬き聖書や寒の入 渡辺貴子

混沌とお国訛りや雑煮椀 岩石隆光

※講座終了とともに、二〇二二年四月より、西村麒麟さん指導による「鴨の会」が発足している。

二〇二二年版（二〇二一年四月～二〇二二年三月）
すぎなみ詩歌館 角川庭園の短歌・俳句

発行日 令和四年（二〇二二年）十月三十一日

発行・制作 特定非営利活動法人 すぎなみ学びの楽園
俳句事業部

住所 東京都杉並区荻窪 3・14・22

電話 031679516855

表紙・扉カット 浅野純子
レイアウト 山下青史